



講義形式の授業で対話を促す手法(2)

～話題の作り方とディスカッションの活用～

鹿児島大学 FD 委員会 FD ガイド WG

【発行/2018年2月】

身近な話題に引き寄せてみる

FDガイド第3号では、本学の授業改善報告書から幾つかの工夫が紹介されています。他大学の事例も見てください。

① 数学必修化に込められた教育意図～思考ツールとしての数学

大阪府立大学は文系の学生にも数学を必修としました。ただし、一般的な数学のテキストは利用せず、数学を専門とする全教員が独自にテキスト(『思考ツールとしての数学』)を作りました。そして定められたゴールは、現実に存在する問題に隠れている数学的構造を探り当て、数学が社会とつながっていることを実感できること、でした。「数学というものは、いろいろな場面で役に立つのかと、文系の人間である私なりに感動した授業でした」、「数学分かってきた。たのしい」といった学生の声が聞かれているようです。

② SNSを活用して日常から学びのきっかけを作る

別大学の事例です。日本語の成り立ちを学ぶ授業で、担当教員は受講生に対してこう呼びかけています。「街などでふと疑問に思う表現、漢字などがあれば、SNSに写真を投稿して下さい」。受講生は積極的に投稿してくれるようで、その中から特に興味深いものを授業冒頭で解説されています。SNSを活用して受講生と対話し、日常に学びのきっかけを見つけようとする、すぐにでも真似できそうな取り組み事例です。

大教室でグループ・ディスカッションを取り入れる

グループ・ディスカッションを大教室で実施するのは困難だ、これは多くの教員が感じていることでしょう。しかし、工夫次第では可能であり、実践事例も少なくありません。

① ペア・ワークから始めてみる

グループ・ディスカッションは、ペア・ワークとするのが便利です。フリーライダー(ディスカッションに実質的に参加しない学生)の出現を抑えることが可能です。まず全員に起立してもらい、話し相手を見つけたら座ってもらいます。そして、例えば本日の授業内容を振り返り、曖昧な点は相互に教え合うように促します。協力して教員への質問を作るように指示する手法もあります。質問作成を重視する場合は、4人でグループを作る方が良いでしょう。恥ずかしさが薄まり、質問できる雰囲気作りにつながるからです。これらは受講生同士の対話を促進する手法であり、教え合うことで知識の定着も期待できます。



② 質疑応答と授業シートの活用

質問が出たならば、教員は授業時間内に丁寧に解説します。質問者以外の受講生にとっても、良い振り返りとなります。グループ・ディスカッション後は、授業シートに学びを記録してもらうのも良いでしょう。これらは教員と受講生との対話と位置づけられます。

なお、グループ・ディスカッション、質疑応答、授業シートの記入すべてを行う場合、最低でも15分程度の時間確保が求められます。時間管理のためには、授業内容を再検討し、アクティブ・ラーニング手法を柔軟に運用することが必要です(ディスカッションを短縮するなど)。

③ グループ・ディスカッションだけでは間違った知識が定着する可能性あり

「講義でグループ・ディスカッションを取り入れると、テストの点数が低下した」。こんな事例もあるようです。誤った理解・知識をグループ・ディスカッションで確認・定着させてしまったからだと推察されます。このことは、質疑応答の大切さを示唆しています。

授業中に解説したことをそのまま質問されると、私たち教員はイライラしてしまうかもしれません。しかし、ここはグッとこらえたいところです。質問して良い・質問できる雰囲気作りを大切に、正しい知識の定着を促しましょう。

11号

12号

13号

14号

15号

16号

17号

18号

19号

20号

他の教員の本音を聞いてみたい



第14・15号では、講義形式の授業で対話を促すアクティブ・ラーニング手法を紹介してきました。しかし、そもそもアクティブ・ラーニング(以下、AL)は本当に学生の能力を向上させることができるのか、何らかのデータで検証されているのか、そんな疑問の声もよく聞きます。以下で紹介するのは、平成29年11月から12月にかけて法文学部と農学部で実施した、ALについての簡易なアンケートに寄せられた回答をまとめたものです。

単純に数を数えると肯定的な先生方が多いけれど

今回のアンケート調査の回答を単純に数えると、回収率は29.1%で、ALに肯定的という回答が33通、否定的が6通、どちらでもないが8通でした。ただ、肯定的な傾向と考えるのは少し注意が必要で、肯定的と回答する先生方も何でもALがよいと言うわけではなさそうです。

アクティブ・ラーニングの成果を感じた体験

アンケートのなかで、実際にALを実施しているという先生方には、「4年次の特殊研究の指導にスムーズに移行できるようになった」「学生が自ら進んで考えようとする」「学生がその時間は寝ることがない」「講義形式の授業の中に、グループ・ディスカッションを組み込み、小レポートを提出させてフィードバックすると効果的」「身近な事象に興味関心を感じるようになった」「授業に興味がないという学生は減ったと思われる」「学生の学習に対するモチベーションや主体性に変化が現れる。学習理解の定着度も高まる」「ミニッツペーパーへの回答時間を設けたことで、少なくともモチベーションの高い学生に限っては、積極的な議論がミニッツペーパーを通じて展開できるようになった」「昨年度よりフィールドワークを導入した演習やグループによる問題解決型のフィールドワークを実施し、学習者がそれらの授業をまとめた授業を振り返りながらまとめたレポートを読むと、一定の効果があると感じられた」「学生同士の交流が増え自ら積極的に議論するようになった」「授業中に資料の読解を実践させることで、学生の関心が高まり、欠席が減った」「モチベーションの高い学生のつながりづくりにつながる」などの記載がありました。

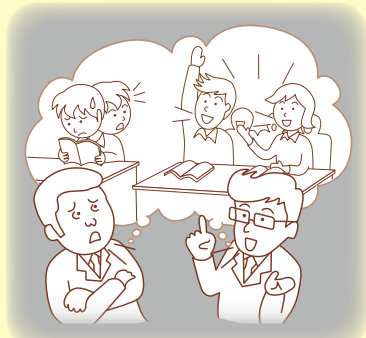
アクティブ・ラーニングに否定的であったり、懸念を示す回答

一方、ALの採用や推進に、「学生の評判が悪い」など強く否定する記載がありました。グループ学習をさせるとき、フリーライダーが出たり、学生の学力やコミュニケーション能力に差があることに強い懸念を感じている先生方、すでにその対応に苦労しているとの回答もありました。講義形式であれば試験で成果を上げられる学生が、グループ学習での平常点評価になったが故に低い評価になるとの記載もありました。また、授業で伝達できる情報量についても、ALでは減らざるを得ないという指摘もあります。

先生方のアクティブ・ラーニングのイメージは多様

先生方のALへのイメージや理解については「課題解決型の授業」「双方向的、学生の問題意識から出発する授業」「学生がテーマを決定し、模擬講義をする授業」「宿題を通して、予習と復習を徹底させる授業」「グループ学習(ディスカッションが含まれるなど)」「座学ではないフィールド実習のような構成」「学生が聞いているだけではなく、主体的に参加する授業」「ディスカッションを中心に、それに基づいて学生が自分で学んでいく形態の授業」「少人数での課題発見型授業」「一方的に知識を提供するのではない授業」「グループワーク・反転学習・クリッカーを使う授業」「学生の主体性を重んじた学習過程や参加型学習を取り入れた授業」「従来の演習型の教育手法を通常の授業科目に汎用する感じ」「ワークショップ」「学生が受け身でない学習形式」等々の記載がありました。

ALの議論をするときには、授業前後の学習をどう勘案するか、教室内の授業を想定するか、教室外の調査や実習を想定するか、プロブレム・ベースト・ラーニング(PBL)を想定するか、どのような学生パフォーマンスを想定するかなど、前提とするイメージや焦点を共通にしておくことが必要なようです。アンケートには、比較的多くの先生方が、教育方法のひとつであるはずのALを過度に押しつけられていると感じていると同時に、実施方法への強い関心も示され、研修や授業参観などを希望するとの記載もありました。



【鹿児島大学FD委員会FDガイドWG】

大前 慶和(学長補佐(教育改善担当)) 米田 憲市(法文学部委員)

齋藤 美保子(教育学部委員) 坂巻 祥孝(農学部委員) 渡邊 弘(共通教育センター委員)